

| | |
|------------|---|
| Title | ペロウとケイジン：ドライサーを巡って1 |
| Author(s) | 鴻巣, 要介 |
| Editor(s) | |
| Citation | 英米言語文化研究. 1998, 46, p.67-74 |
| Issue Date | 1998-03-31 |
| URL | http://hdl.handle.net/10466/10621 |
| Rights | |

ペロウとケイジン

— ドライサーを巡って 1 —

鴻 巣 要 介

PLAYBOY： '30年代後半の小説に大きな影響を受けたと思いますか？

ペロウ： 思うよ。われわれの世代はドライサー、シンクレア・ルイス
などを読んで育ったからね。(中略)ドライサーの『アメリカの
悲劇』は痛ましくて読むのが辛かった。

PLAYBOY： どこがです？

ペロウ： 恐ろしいよ。妊娠した女をボートに乗せて殺すなんてね。¹

At a time when the one quality which so many American writers have in common is their utter harmlessness, Dreiser makes painful reading.²

I

最初の引用は、ソール・ペロウの最近のインタビューの一部であり、二つ目はアルフレッド・ケイジンのセオドア・ドライサー論の一節である。この二人はともに1915年6月にユダヤ系の2世として生まれた。こうした出生の共通点を持つ二人がドライサーという作家に関して「読むのが辛い」という

1 ローレンス・グローベルによるインタビュー（野中邦子訳）プレイボーイ日本版1997年7月号、106頁。

2 Alfred Kazin & Charles Shapiro (eds.), *The Stature of Theodore Dreiser* (Bloomington: Indiana University Press, 1955, Midland Book edition, 1965), p.3. 以下本書からの引用には括弧内にページ数を付す。

感想を共有している。一方批評家として独立した後のケイジンは繰り返しドライサー擁護論を発表し、また小説家ソール・ベロウとドライサーとの関連性は早くから指摘されていた。次の引用はそれが最も端的に現れたものの一つである。

But Bellow is not only in a tradition of Jewish-American writing; he is fairly in the major traditions of American literature which date from the nineteenth century. In particular his work relates him quite clearly to Whitman and Dreiser.³

小論では、二人にとってドライサーとはいかなる意味を持つ存在であったのかを、とりわけユダヤ系文学者の形成という側面を意識しつつ論じてみたいと思う。その前提としてまずはドライサー評価の変遷を概観しておこう。

II

ドライサーを真っ向から否定する本格的論考が発表されたのは奇しくもベロウとケイジンが生まれた年だった。雑誌 *The Nation* の12月2日号に掲載された Stuart P. Sherman の “The Barbaric Naturalism of Mr. Dreiser” がそれである。Sherman のドライサー批判の要点は以下の通りである。

(1) ドライサーらはリアリズムと称して自分たちが初めて「生の現実」を描き得たように言っているがそれは誤っている。先人の認識方法を批判し、現実をより「真に」描くことを主張するのは過去の文学にも既に見られた極く当たり前の現象である。

(2) リアリズム作家が主張するように現実を写真や映画のように客観的に「写す」ことは不可能である。人間は「理論」もしくは “philosophy of

3 Tony Tanner, *Saul Bellow* (Edinburgh & London: Oliver & Boyd, 1965), p.10.

life”にしたがって事実を取捨選択し、再配置する。

(3) それゆえ、作品の優劣を論じるためには作家の「理論」、「哲学」を検証しなくてはならない。ドライサーのそれは'a crude and naively simple naturalistic philosophy'であり、人間の行動を主として動物としての本能に還元してしまう「乱暴な一般化(brutal generalization)」という誤りを犯している。

(4) 理論が乱暴なために作品も粗雑に作られている。人間の行動を本能で説明するから、登場人物は経験からなにも学ばず成長(develop)することがない(登場人物の成長を説得力を持って描くことこそが小説家の本来の責務である)。ドライサーの小説は主人公が性的対象としての女(男)を追い求めるか、金銭・富を追い求めるかの二つの行動が交互に語られるだけの単純で退屈な話にしかならない。

(5) 他方、性的欲望と物質的欲望以外の要素も取り入れようとする、*Jennie Gerhart* の場合のように登場人物の行動のつじつまが合わなくなる(e.g. Jennieは敬虔なキリスト教徒でありながら自分が未婚の母になることを罪とも恥とも思わない)。つじつまが合わない行動をもっともらしく見せるため無関係な部分を細かく描写してみせるという一種のペテンのテクニックを用いるが、そのためただでさえ長くて退屈な作品がさらに長大なものになってしまう。

上記の非難のうち(1)と(2)はわれわれの認識に照らしても妥当な指摘である。Shermanの批判の骨格を作っているのが(3)である。ドライサーの作品よりも彼の思想を批評の対象とし、思想が誤っているから作品にも価値がないという論法は後のドライサー批判に繰り返し現れるものであり、また最も有効な批判だったと言える。しかし反面、彼の作品の持つ力が余りに強大で、それを正面から否定することができないので予先を思想に向けたのだとも考えられる。そういう目で見れば、すなわちドライサーの小説家としての力は必ずしも彼の「自然主義」理論によるものではないという立場をとれば、Shermanのような批判は効力のないものになってしまう。そしてこれ以降のドライサー評価を巡る論戦では、批判派は彼の思想の不完全性をより鋭

利に徹底的に指弾し、彼を擁護する側は思想の不完全性と作品の持つ力とをどうにかして矛盾なく説明しようと努力する（が必ずしも成功しない）という方向にそれぞれが進んだのである。

Sherman のドライサー批判の中ではあまり言及されていないが、ドライサーが登場した最初から常に彼を非難する理由とされていた点に言語表現の問題がある。『シスター・キャリー』では剽窃が問題になったように、ドライサーは既製の文章をあちこちに取り入れたり、あまりにも古めかしい定型表現やかびの生えたような比喩を多用している。彼を擁護する者の中にはこれをちょうどマーク・トウェインがミシシッピ川流域の言葉を生き生きと再現したように、ドライサーが中西部の口語表現を写したものだと言う者もいたが、公平に見てその主張にはかなり無理があったといえるだろう。また必ずしも Sherman が (5) で主張するような理由からとは思えないが、ドライサーの作品はバランスを欠くほどの細部の描写に満ちている。しかもそれが必ずしも統一した効果を上げず、時にはむしろ印象が散漫になってしまうことすらある。こうした細部へのこだわりの底には何が潜んでいるのか、これを解明することも以降のドライサー評価の課題として残された。

Sherman 論文について最後に少し外面的な指摘をしておこう。論文のはじめの方で彼は「リアリズム作家の場合自伝的事実は常に重要だから」となやら持って回った断りを入れた上で、ドライサーがドイツ系アメリカ人であることを告げる。次の引用はその少し後に続く部分である。

I do not find any moral value in them [five novels by Dreiser], nor any memorable beauty—of their truth I shall speak later; but I am greatly impressed by them as serious representatives of a new note in American literature, coming from that “ethnic” element of our mixed population which, as we are assured by competent authorities, is to redeem us from Puritanism and insure our artistic salvation. (p.72)

この論文が発表されたのが1915年12月であることは既に述べた。第1次大戦は既に始まっていたがアメリカ合衆国はこの時点ではまだ中立を守っていた。しかしルンタニア号事件などで対独感情は悪化していた。そのような時期に、「道徳的価値」や「美しさ」に欠けるといふ否定的評価と作家の民族性との関連をほのめかし、しかもその民族とは「敵性国家」のそれであることを持って回ったやり方で強調するのは到底フェアな態度とはいえない。Sherman 論文に対してはこれらの点を含めた上での評価が必要であろう。こうした論文を掲載した*The Nation*は、実は同じ年の2月には文化的多元主義(cultural pluralism)の先駆けとも言うべきユダヤ系の哲学者 Horace Kallen の論文“Democracy Versus the Melting-Pot”の掲載誌でもあった。相対立するような性格の論文が同じ雑誌に同じような時期に掲載されたという事実は、東部のインテリ層、西部に起こった反抗の文学などは念頭にない人々を対象として出発した雑誌の混乱を示唆すると同時に、当時のアメリカ社会の両極化(「100%アメリカ主義」と呼ばれるような国粹主義と「文化的多元主義」に現れた多様な民族性の肯定)とそれに伴う緊張を表していると考えることができるだろう。

雑誌 *The Nation* とドライサー批判の関わりは実はこれで終わりではなかった。ある批評家の言葉を借りれば、“the most destructive recent attack on Dreiser’s mind, style, ideas, and late political and religious beliefs” (p.161)が1945年のドライサーの死後間もなく発表されたのが同誌の誌上だったのである。なお時系列で言えばケイジンの最初のドライサー論の方がこの論文に先行しているのだが、叙述の都合もあり、ケイジンのドライサー論は後でまとめて検討することとしたい。

III

ドライサーは1945年12月28日に死去した。死の年彼は共産党入党する。その一方でキリスト教教会の宗教儀式に足繁く参加するようになっていたが、多くの人々の目には矛盾する行為に映ったに違いない。

約4ヵ月後、ライオネル・トリリング(Lionel Trilling)は“Dreiser and the Liberal Mind”と題した論文を発表した。⁴ この論文は大きく二部に分かれ、その前半ではアメリカ思想における「現実」理解の特徴を論じ、後半でそうした「現実」理解の欠陥が文学の評価という領域でどのような損害をもたらしているかをドライサーを中心に考察している。周知のごとく、トリリングはユダヤ系として初めてコロンビア大学の英文学講座の教授に就任した先駆者といえる人物であるが、彼のドライサーに対する評価は10歳年下のペロウやケイジンとは、同じユダヤ系でありながら著しい対象をなしている。

トリリングは *Main Currents in American Thought* の著者 V. L. Parrington を狂言回しにして論を進める。なぜ Parrington か？

Parrington formulated in a classic way the suppositions about our culture which are held by the American middle class so far as that class is at all liberal in its social thought and so far as it begins to understand that literature has anything to do with society.

(p.132)

言い換えれば、彼はあまり独創性はないが広い範囲の知識を要領よくまとめる能力には長けているということだ（この論文はこういった感じの皮肉な物言いにあふれている）。ところが彼には‘complex, personal, not literal’な芸術作品に直面すると判断が下せない、あるいは誤った判断を下してしまう欠陥があるという。しかもそれは彼の個人的な嗜好(taste)の誤りではなく、理解の仕方が構造的に間違っているので、その構造的誤謬は「現実の本質とはこういうものだという想定(assumption about the nature of reality)」に由来するのだと主張する。Parrington が間違っているということはトリリン

4 この論文は後に改訂増補され、タイトルを“Reality in America”に変えて *The Liberal Imagination* (New York, 1950)に収録された。小論で扱うのはこの改訂増補版である。

グに従えばほとんどのアメリカ人が誤りを犯しうることになる。

Parrington に典型的な形で現れる「現実」の理解の仕方をトリリングは次のようにまとめる。

There exists, he[Parrington] believes, a thing called *reality*; it is one and immutable, it is wholly external, it is irreducible. Men's minds may waver, but reality is always reliable, always the same, always easy to be known. And the artist's relation to reality he conceives as a simple one. Reality being fixed and given, the artist has but to let it pass through him, he is the lens in the first diagram of an elementary book on optics: Fig. 1, Reality; Fig. 2, Artist; Fig.1', Work of Art. Figs. 1 and 1' are normally in virtual correspondence with each other. (p.133)

認識主体である人間が透明なレンズとなって外部の現実をそのまま写したものが芸術作品となるというこの図式は、基本的に Sherman が批判したリアリズム作家の認識論と同じものである。トリリングは Sherman よりも勢位をさらに上げて、こうした認識論が文学の領域だけでなくアメリカ社会全体の認識論の主流となっていると主張したがつているように、そしてその状況を批判したがつているように思われるのだ。

さらにトリリングはこうした認識論の不備を指摘する。人間の希望や欲望が現実を飛び越えていくという事態は、Parrington のような考え方に従えばまずは「現実からの逃避」として忌むべきものであるが、その魅力を全く否定することは自らの経験が許さない。それゆえ「現実」と「現実を越えた事態」に対してアンビヴァレントな態度が生まれるのだ。

Whenever a man with whose ideas he disagrees wins from Parrington a reluctant measure of respect, the word romantic is likely to appear. (p.134)

Sometimes he[Parrington] speaks of reality in an honorific way, meaning the substantial stuff of life, the ineluctable facts with which the mind must cope, but sometimes he speaks of it pejoratively and means the world of established social forms; and he speaks of realism in two ways: sometimes as the power of dealing intelligently with fact, sometimes as a cold and conservative resistance to idealism. (pp.134-135)

結局 Parrington のような考え方では人間の精神活動が作り出す「現実を越えた事態」はそれ自体として規定することはできない。常に現実の陰画として、それ故に否定的に語ることしかできない。Parrington が Hawthorne、Poe、James といった精神が作り出す世界を描く作家たちを肯定しないのは作家たちの側に責任があるのではなく、Parrington らの認識論の限界が露呈しているだけなのだとしてトリリングは厳しく指弾する。この限界に気づきつつもそれを承認する勇気に欠けるため、その反動として自分たちの認識論の枠内に収まっているような作家に対しては甘い態度を取ることになり、それが作家たちの墮落を生むのだ。その典型的な例がドライサーなのだというのがこの論文の前半と後半をつなぐトリリングの論理であるように思われる。